

CheFuKo

通信
Vol.13

2018年下半期活動

2018年8月24日～29日

ウクライナ & 福島子ども交流プログラム

クリスマスカード交換企画

2018年9月15日～20日

ウクライナ調査活動

2018年11月10日～18日

ネパール支援・調査活動

今号は2018年下半期の活動をまとめたものです。内容は「ウクライナ & 福島子ども交流プログラム」、「ウクライナ調査活動」、「ネパール支援活動」の三本立てになっています。団体にとっては毎回はチャレンジの連続ですが、特に今回は、ネパールでの体力テストの実施やウクライナの汚染地域での取材など新たな取り組みが多い半年となりました。この通信を機に、当団体の活動にご理解・ご協力いただければ幸いです。

写真：ウクライナ & 福島子ども交流プログラムで茶道体験をした福島市の浄楽園での一枚



ウクライナ Ukraine



調査活動

2018年は9月15～19日で、ジトミル市、オブルチ市、ナロジチ地区を調査しました。ウクライナが抱えるチェルノブイリ原子力発電所事故などによる健康被害の状況及び財政危機の深刻さを知ることができました。

①サナトリウム(保養所)～国民の健康を守る取り組み～

■訪問地

- ・カピタニヴカ・サナトリウム：1986年設立。キエフ郊外にあり、事故処理作業員だけでなく一般人の保養も受け入れている。
- ・デネシー・サナトリウム：1985年設立。ジトミル市にあり、1年間に5,600人が訪れている。子どもは1カ月に約100人(汚染地域に住んでいる子は無料)、大人の30%は被災者として認定されたステータスを持つ人々である。

ウクライナでは治療を目的とする医療施設とリハビリを目的とするサナトリウムに分かれています。カピタニヴカは医療施設としての許可証も有しているため治療も施しています。泥やハーブ、アロマなどを使用する治療法や温熱療法、水圧マッサージ、針治療、塩の部屋でのセラピー、医師の指導管理のもとに行うジムでの運動などを取り入れています。保養に訪れる人の多くは血圧や頭痛、肥満の問題を抱えています。現在は東ウクライナでの戦争に参加した兵士の重い防弾チョッキによる背骨の湾曲や精神的ダメージが増えています。施設に来る子どもの中には被災者としてのステータス保持者や貧しい家庭の子どももいて、食事ができることがとても重要になっています。ソ連時代は政府が運営していましたが現在では政府の予算では薬代、食費、光熱費、人件費が賄われているのみで施設を運営するには足りず、ホールや会議場を有料で貸し出したり、レジャーやスポーツ選手の合宿所として提供することで自力で稼いでいます。一番の課題は人材不足と設備の老朽化で、ヨーロッパで使われていた中古の機械を安く買っていました。最近ではそれも値上がりしているため設備を入れ替えることが難しく一番必要な血液検査機は一台もありません。



水泳によるプログラム



保養プログラム中の子どもたち



医師の指導のもと運動する



呼吸器の治療に使う塩の部屋



保養施設周辺の豊かな自然

②リッチマネ村・ジェルバ村 ～汚染地域で暮らす人々～

■取材協力者

住民：オリヤ・ホムトブシカ氏(60歳・女性) バリヤ・スタシュクヴィッチ氏(80歳・女性) カーチャ・バラノヴスカ氏(81歳・女性)
フェジェ・バラノヴスキ氏(推定80歳・男性) カーチャ・スタシュクヴィッチ氏(81歳・女性) ラーヤ・サリチュク氏(61歳・女性)

【村の実情や住民の健康状態・考え方】

事故前は80世帯ほどの村でしたが、現在では数えるほどの村民しかいません。放射能の影響を案じただけでなく、働く場所を失ったため村を出て行った人も多くいます。中には避難先で「チェルノブイリ人」と呼ばれいじめられた方も少なくありません。一方で事故後、村には多くの空家があり自由に住めるという理由で静かな暮らしを好んだり信仰心が篤かったりする人々は移住して来ています。住民は自給自足の生活で、放射能が蓄積されやすいと言われるキノコやベリー類も口にしていますが放射能の値は高くないと話します。住民によれば事故直後、ウクライナ政府は汚染地域に住む人々を放射能の影響を調べる実験台とみなし、間もなく亡くなると考えていたそうです。ところが彼らのように汚染地域に住みながらも長生きしている人は少なく、逆に避難した元村民は既に皆亡くなっています。彼らは放射能が人体に与える影響を知りつつも、もう一度同じ事故が起きたとしてもリッチマネに住み続ける意思を持っていました。バリヤ氏は「もう老人だから放射能は怖くないし、どこにいても放射能はある」と考えています。ラーヤ氏は「人は生まれた場所に住み続けるべき。何が起きても離れてはいけない」と語ります。

チェルノブイリ原発から約50kmの位置にあるジェルバ村には誰も住んでおらず廃墟のみが残されていました。鮮やかな青色の教会や商店や学校、村役場が残されていましたが朽ちて内部には瓦礫の山が築かれていました。役場の資料らしき用紙やガスマスクなど人が暮らしていた気配が感じられるものもいくつか見つかります。このエリアの放射能の値は最高値で0.5 μ Sv/hでした。



リッチマネで暮らし続ける住民



バラノヴスキご夫妻の家



ジェルバ村の荒廃した元商店



放置されたままのガスマスク



今調査で最高値の0.5 μ Sv/h

③【居住制限区域ナロジチでの暮らし】～「汚染地域」であることを望む住民～

ウクライナ国内は汚染の程度によって第1～4ゾーンに分けられていて、チェルノブイリ原発の西側約70kmに位置するナロジチ地区は「第2ゾーン」に認定されています。ナロジチは本来、居住や労働は制限されていますが、病院、学校、幼稚園がそれぞれ1つずつあり町としての機能を果たしています。事故前は学校が2校あり約1,000人ずつ生徒がいましたが、現在では1校のみで生徒は400人強です。同校に通う生徒は年に1、2回無料で保養プログラムを受けることができ、給食は無料で食べられます。給食には放射能の影響を受けていない地域の食材が使われています。1日の給食費は1人あたり小学生は100円、10～14歳は108円、14～16歳は116円かかりますが政府から支給されています。また、定期健診で甲状腺、胃腸、消化器官、骨の異常や糖尿病が見つかったら無料でキエフの特別な施設で治療を受けることができます。毎回の健診ではほとんどの生徒に何かしらの異常が見つかります。同校の生徒を含む第2ゾーンのステータスを持つ子どもは、卒業後故郷に戻ることを条件に、大学入試の出題レベルが易しくなったり、学費や大学の寮費が免除されたりとさまざまな面で国から保障を受けられ、優遇されることが多いです。もし故郷に戻らなければ大学でかかった費用の支払い義務が生じますが、特別な許可があれば免除されるため病气や結婚などを理由に、故郷に戻らない学生が多いのが現実です。

「汚染地域・第2ゾーン」としてさまざまな支援の手が入っているナロジチ地区ですが、実際に同地区の放射線濃度を計測してみると、他の国民が生活している町とほとんど変わらない数値でした。そのため再調査をすればナロジチ地区が「第2ゾーン」から外れる可能性が高いと考えられます。政府としても汚染地域でなくなれば住民に補償を与える必要がなくなり、法的な労働制限も受けずに済むため工場や企業の誘致を可能にして税金を増やすこともできるので好都合ですが、制限を解除するための調査をする費用がないため現状維持のままです。住民も補償が受けられなくなるので「汚染地域」でなくなることに反対しています。

「第2ゾーン」のナロジチでは国に労働が制限されているので、国が運営する施設以外での仕事はありません。それに対しナロジチ地区は、女性が働ける場として服の工場ができることを望んでいます。例外として元々現地に住んでいる人は就労を認められており、国が給料を支払っているため自治体ではなく国に税金を納めています。国が労働を制限しているにも関わらず、ナロジチ内にある病院や学校には国から予算が出ていることに矛盾を感じました。



ナロジチの学校の校舎



ナロジチの学校の生徒



取材に応じてくれた学校の先生たち



ナロジチの幼稚園の園児

【ナロジチ住民の健康状態】

ナロジチ病院のマリア・パシュック医院長によると、現在多くの患者にみられる疾患は、大人では心疾患、がん、甲状腺の内分泌系疾患、精神病の順に多く、子どもでは呼吸器系疾患と消化器系疾患が多いと言います。事故の影響として良く知られているのは甲状腺がん患者が増加したということですが、特に1998年からナロジチ地区とコロステン市の子どもの罹患者が目立つようになりました。2014年までに1万600人の子どもが治療のための手術を受けています。また、セシウム137で汚染された土地の野菜や果物、水からの内部被ばくが増え、心臓血管系に悪い影響を与えたとも考えられています。しかし、事故後一番の問題は、先が見えない不安によるストレスでした。近年では新しい病気が増えてきており、その治療のためには試験薬と研究施設が必要です。試験薬は市販で購入することはできず、たとえ一般の人が手に入れたとしても法律上医療関係者以外の方が用意した試験薬は使用することができません。また、医療予算も減り、薬の価格も高騰したため病院でも手に入れることが難しくなりました。同病院における他の問題としてはスタッフが不足していて、特に医者の数が足りず、麻酔科医に関しては一人もいないことです。国によって出身者以外はナロジチ地区で働いてはいけないと決められているため、以前麻酔科医としてやってきた女性は正式に就職することができず辞めてしまいました。また、第2ゾーンであり、給料も低いことから志願者がいないことも深刻な問題です。

ウクライナではチェルノブイリ原発事故の被災者として認定され、そのステータスを持っていないと無料で保養に行く権利や補助金を受け取れません。また、ステータスを得ていても治療費が高すぎて補助金では賅いきれません。「ウクライナ人にとって一番恐ろしいことは病気になることだ」と言います。日本の様な皆保険制度がないウクライナでは診察は無料でも治療費や薬代は高額で、治療がままならずそのまま亡くなる人もいます。



ナロジチの幼稚園の園庭



ナロジチ病院のマリア・パシュック医院長



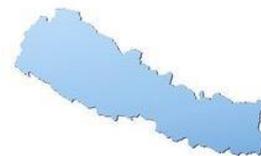
ナロジチ病院の診察室



地区内の放射線濃度は0.11μSv/h



ネパール Nepal



支援活動編

11月10日～18日にかけて、ネパールで支援活動を行いました。
 2015年4月25日に発生したネパール大地震から3年半が経ちました。私たちの団体は2015年5月からネパールで支援活動を始め、現地取材・調査を含め団体としては通算12回目のネパール訪問になります。今回の活動内容は、①現地の方への温熱施術、②訪問先の学校および施設の子もたちへの支援物資寄贈、③現地の子もたちとの交流(レクリエーション)でした。
 カトマンズ郡では2カ所の学校と3カ所の施設、首都カトマンズから車で約2時間の場所にあるカーブレ・パランチョーク郡では、飢えた虎に自分の腕の肉を与えて救った王の生まれ変わりがブッダであるという伝説の舞台になったナモ・ブッダ村の学校を訪問しました。

①温熱施術～ネパール人への健康支援～

前回に引き続き今回も現地の3人の大学生がセラピストの一員として協力してくれました。私たちが現地ですまざまな活動ができるのも彼女たちのお陰です。また、こちらも前回同様簡単なエクササイズのちらしを施術を受けていただく方に配布し、今回は腰の痛みへの対処方法を紹介しました。施術を受ける方の中には腰や肩に慢性的な痛みを抱えている方が多いため、現地の方がちらしの情報を元に普段の生活から自分自身で痛みに対処できるように力になっていきたいと思えます。今回は400人以上の方に施術を受けていただき、何人かリピーターの方もいらっしゃいました。「毎月、毎日でもやってほしい」というお言葉をいただいたので、次回も現地の方々に満足していただけるように取り組んでいきます。

②支援物資寄贈～子どもたちの学習をサポートしたい～

- ・ラダクリシュナ コミュニティセンター(カトマンズ): ノートパソコン1台/クリアファイルケース13枚/クリスマスの絵本1冊
- ・ライジングロータス(カトマンズ): ノートパソコン1台/クリアファイルケース36枚/クリスマスの絵本1冊
- ・公立シュリー・ハヌマン学校(ナモ・ブッダ村): 鉛筆220本/蛍光マーカー228本
- ・私立ヒムシーラ学校(カトマンズ): 鉛筆156本/蛍光マーカー152本

ネパールは学歴社会であるため子どもたちにとって学校の成績は将来を左右するほど重要なものですが、生活水準が低く、その影響もあり教育環境が整っていない地域が多く存在します。またネパールの学校ではパソコンの授業に力を入れていますが、学校や施設ではパソコンが故障しても高価であるため買い替えることができないなど設備が十分に整っていません。

「里親プロジェクト」の支援先2施設では子どもたちにクリスマスカードを作ってもらいましたが、ヒンドゥー教徒の多いネパールではクリスマスに対する馴染みが薄いため、クリスマスに関する簡単な絵本の読み聞かせを行い理解してもらいました。

これらの支援物資は支援者の方々の寄付金で購入しました。ご支援本当に感謝いたします。



シュリー・ハヌマン学校
施術風景



ヒムシーラ学校
配布した鉛筆を持つ子どもたち



ラダクリシュナ コミュニティセンター
寄付したパソコンを操作する施設の子も



ライジングロータス
クリアファイルを持つ施設の子も

③子どもたちとの交流(レクリエーション)～子どもたちが自分の身体能力を知るきっかけに～

今回訪れた学校では、前回好評だったドッジボールを実施しました。初めてドッジボールをプレーする子どもたちはルールをすぐ理解し楽しんで取り組んでいたように思います。一方、ボールの投げ方が両手投げになってしまうなどボールの扱いに慣れていないことから、普段あまり運動する機会がないこと、運動をしたとしても技術的な指導がしっかりされていないことがわかりました。

また今回は初めての取り組みとして、「里親プロジェクト」の支援先2施設で日本の「新体力テスト」を基にした体力テストを実施してみました。子どもたちは自分の測定結果だけでなく、他の子どもたちの結果と比べることで自分の身体能力がどの程度なのかを知ることができたと思います。結果としては、測定に十分慣れていないということもあるかもしれませんが、日本の子どもたちと比べると全体的に記録が低い結果となりました。しかし項目によっては良い記録を出した子もいます。今回は時間の関係で全ての項目を実施することができなかったので残りの項目は次回行います。今後も測定を続けることで、子どもたちの身体的成長を本人と施設関係者が知る機会となり、支援者の方々にも彼らの成長過程をお伝えすることができると思います。



シュリー・ハヌマン学校
両手でボールを投げようとする子ども



シュリー・ハヌマン学校
ボランティアもドッジボールに参加



ラダクリシュナ コミュニティセンター
体力テスト: 立ち幅跳び



ライジングロータス
体力テスト: 長座体前屈

取材編

【警察事情】～犯罪は国家に対する不満か～

ネパール国内は、2008年の王制崩壊時の混乱期と比べると治安は安定しています。しかし窃盗、強盗、薬物などの犯罪が多く、各学校へ情報をながしたり定期的にオリエンテーションなどを実施して防止に努めていますが大きな改善は得られていない様子でした。また、近年ではサイバーテロや、インターネット上で知り合った相手から被害を受けるなどこれまで想定できなかった類の犯罪が目立っています。また、最近では2歳や8カ月の女兒が性的暴行を受ける事件も起きています。警察側の考えでは、こうした犯罪は国家に対する不満や不平を主張するための手段になっているそうです。



取材に協力してくれた警察官2人

ネパールでの警察の課題として、通信レベルと捜査能力の低さが挙げられます。通信に関しては、無線のつながりが悪かったり連絡系統がしっかりしていなかったりするため事件・事故が発生してから現場へなかなか急行できません。捜査能力に関しては、100日前に起きた強姦殺人事件で、容疑者の衣服や体などが全て洗われていて容疑者につながる手がかりや痕跡が全て消されているため検挙できていないという事例があります。

【学歴社会と教員事情】～子どもたちにとって重要な存在である教師の位置づけ～

ネパールは高校卒業時の試験(SEE)の成績で将来就ける職業が決まり、高ランクがサイエンス分野、次いでマネジメントですが、教師になるために専攻する教育分野は最下位に位置付けられています。教育分野を専攻する場合、ネパール語、英語、社会科の評価がD以上であれば数学はE(Fail)でも認められます。当然、教育専攻を卒業しても公立学校の教師になるためには年に1度行われる政府の試験に合格して資格を取得しなければなりません。国の未来を担う子どもたちを教育する職業に求められるのが最下位の成績であるということには衝撃を受けました。一方私立学校の教員は実績が相当重視され、学校側からヘッドハンティングされることもあります。日本と同様に公立よりも私立の方が教育レベルが高いと考えられているのはこうした背景があるからではないでしょうか。一方で、私立は生徒のケアが充実しているため生徒自身が甘えてしまいがちになるという難点もあります。公立では生徒は学校へ期待せず自力で勉強しなければならないことを身に染みてわかっているため、SEEの成績は公立の方が良いことも珍しくありません。

【ある私立学校の取り組み】～子どもたちに良い教育を～

ネパールの学校では、校長は授業を担当の教員に任せて放置していることが多いようですが、訪問した私立ヒムシーラ学校の校長先生は自分の経験と知識を生かして生徒全体への指導や教育方法の改善に努めており、自ら数学と理科の教鞭を取ることもあります。そうすることでどの生徒がどの程度理解でき、またどこに躓くのか、何が好きで何が嫌いかを見極めることができ、より分かりやすい授業を目指せると話していました。また、校長は早朝5時に出勤して学校の改善方法を考えており、朝早く出勤することは他の先生が勤務態度を改めるきっかけにもなると考えています。また、ネパール全体の学校、特に公立学校では軽視されがちな体育の授業の価値を理解し、カリキュラムに取り入れています。週に2回体育の授業を実施し、毎朝15分ほど体操の時間を設けています。学習の前にエクササイズを取り入れることで集中力や記憶力が増し健康維持にもつながると考えているからです。また、生徒の中には卒業後スポーツの道に進みたい子もいるのでその夢に近づけるようにという目的も兼ねています。



私立ヒムシーラ学校の校長先生

本来、多くの私立学校では入学してすぐ3カ月分の授業料を払わなければならないため経済力のない家庭の子どもへの入学を認めていませんが、同校は保護者と面談をすることでどんな家庭の子どもも入学できるように尽力しています。例えば、1家庭に6人以上子どもがいる場合はそのうちの3人の授業料を免除しています。同校の考えでは、女子生徒の方が男子生徒に比べて立派な教育を受けさせてもらえにくいという理由から女子生徒への支援を充実させています。ただ、生徒への支援を手厚くしている反面学校の経営状況は厳しく、教員やスタッフへの給料を数カ月間支払っていません。

【「里親プロジェクト」の支援対象施設 ライジングロータスの子どもたちが通う私立学校の実情】

“Green Village Education Foundation”はライジングロータスで暮らす子どもたちが通う私立学校です。保育園から10年生までの学生約800人が在籍するマンモス校で、地区内の名門校として3年連続トップ校に輝いた実績があります。同校は上質な教育を与えることを最優先しており、SEEをGPA3.8でパスした優秀な生徒も輩出しているため入学希望者が非常に多いです。また授業は座学だけでなく実践を交えた教育をベースにしていて、生徒が主体的に授業に参加することで一人一人が理解することを目指しています。授業を見学させてもらった際も理科の授業では、生徒たちが校庭へ出て糸電話の実験をしていました。また、どのような教員を選ぶかも大切にしている、教員の内面を踏まえ学校の方針に共感できる人材を雇っています。

ライジングロータスの子どもたちは相当田舎の地域出身の子が多く、学校に来たばかりの頃は手や顔の洗い方が分かっていないなど生活の基礎ができていませんでした。それを一つずつ覚え、努力もし続けて高成績を維持できるようになりました。卒業したばかりのスージャン・タパは、施設に来たばかりの頃は国の公用語であるネパール語すらまともに話すことができなかったそうですが、GPA3.8という高成績を修めました。施設の他の子どもたちも学業だけでなく課外活動や貧困地域への社会福祉活動にも積極的に参加していて他の生徒のお手本になる行動が評価されていました。



SEEの好成績者の看板

← 朝礼の様子



祝福を受けるスージャン・タパ

← 糸電話で学ぶ理科の授業





福島×ウクライナ



ウクライナ&福島子ども交流プログラム 8/24~29

目的: チェルノブイリと福島での原発事故という共通の経験を持つ両地域の子どもたちが触れ合い、心を通わせることで苦難を乗り越える力を育むと同時に、交流を通じた両国の友好関係を促進する。

【参加した中学生4人の紹介】

今回はチェルノブイリ原発事故の影響が深刻なオブルチ市の第3学校の生徒を招待しました。海外に出るチャンスが少ないウクライナの子どもたちにとってこのプログラムは成長への大きなチャンスになりました。



イヴァン(14歳)
動物とアニメが好き
将来の夢は獣医さん



ソンヤ(14歳)
歌と自分で詩を作ることが得意な秀才
いつも落ち着いている



フェジェ(15歳)
ボクシングを習っていて、日本の天皇制に興味がある
アピール下手で損をすることも...

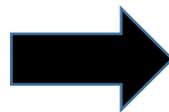


ナスティヤ(14歳)
ダンスが得意で元気いっぱい
以前、父親が放射能の影響で故郷を離れた

2018年5月24日



学校側で3次選考まで行い、39人の応募者の中から選抜された10人を私たちが現地で面接しました。歌やダンス、楽器の演奏、日本への想いなど、子どもたちの気持ちのこもったプレゼンに選考はかなり難航しました...



決定後



日本へ行けるなんて夢みたい。両親に行くことが決まったら「嘘だ」と言われた。でもそれが本当だと分かったら涙を流して喜んでくれた。本当に信じられない。

→3カ月後、彼らは初めての飛行機で  初めての日本へ!!



【行程】

8/24(金) ウクライナから日本へ

25(土) 水族館-薄磯海岸で海水浴-BBQ (いわき市・福島市) 

26(日) 農業体験-流しそうめん-日本庭園で茶道-地元大学生と交流(福島市)

27(月) 福島市長表敬訪問-福島の実家にホームステイ(福島市・桑折町)

28(火) フルーツ狩り-桑折町立醸芳小学校の児童と交流 (桑折町)

29(水) 東京観光-帰国 (お台場周辺) 



写真: 成田空港到着後

＜初飛行機の感想＞
意外にも4人とも特に恐さは感じずリラックスできた様子。機内食で出た「しょう油」が口に合わず、その後の食事に尾を引くことに。。

～交流活動ダイジェスト～



全員水族館は初体験！！子どもたちのカメラのメモリーがここで半分以上なくなってしまったと後から聞きました。



東日本大震災の展示コーナーを見学。壁に記された津波の高さに驚きの表情を浮かべていました。皆、真剣に話を聞いています。



流しそうめんを体験しました。次から次に流れてくる麺に慣れない箸を使って楽しみながら食事をしました。大興奮でした！！



福島市の浄楽園で茶道体験をしました。厳かな雰囲気にも圧倒され神秘的な面持ちで臨んでいました。お茶は苦かったとのこと。



1回で終わるはずのスイカ割りは強いリクエストで2回も！農業国のウクライナは食べ物を大事にする文化で衝撃だったようです。



釀芳小学校の給食の時間にお邪魔しました。生徒さんが黒板を使ってウェルカムボードを作成してくれました。給食の味は...



小学校で書道、お手玉等日本の遊びを体験しました。また、格闘技やダンスを日本の子どもに教えて交流しました。



練習をしてきた踊りを披露しました。ウクライナの伝統的な踊りに現代の音楽をミックスさせたようです。見ていてとてもほっこりしました。

<交流を終えての感想>



フェジェ

故郷に帰ってきた今でも深い思いが残っています。今回の旅行で、外国や自国に対する考え方が大きく変わりました。日本は全ての道がきれいで、どこにもゴミが落ちていませんでした。そして今、私はウクライナに帰ってきてからも、ホームステイと一緒にすごした家族の子どもと連絡を取り続けています。私は日本が大好きです。



ナスティヤ

こんなに興味深い国を訪問できる素敵な機会を与えてくださった関係者の皆さまに感謝いたします。個人的に、日本人の他人に対する優しさや、きちんとしているところに心を打たれました。彼らの優しさや謙虚さはとても素晴らしいと思いました。私にとっては特に海で泳いだり、日本の学生と交流を持てたりしたことが印象的でした。



イヴァン

日本での5日間は忘れられない思い出となりました。特に海で泳いだことは一生の思い出です。日本人の自然を守ることにとても重きを置いている姿勢はウクライナ人との良く似た共通点だと感じました。特に私にとって特別な時間になったのはホームステイ先の家族との交流です。彼らと過ごした時間はとても楽しかったです。私は彼らが本当に好きでウクライナを訪れてほしいです。



ソンヤ

水族館と東日本大震災の様子が展示された博物館は忘れられない思い出です。日本食は初めて食べましたが、「美味しい！」と素直に思います。また海も人生で初めて見ることができました。とても面白くて船乗りになった気持ちで海の中を歩きました。日本の学生と交流が出来たことも、とても嬉しかったです。皆、フレンドリーで、礼儀正しく、道路はとても綺麗で並んでいる家々は素敵でした。

<その後>

翌月に私達はウクライナに渡航し彼らとそこご家族に再び会う機会がありました。子どもたちは初めての海外で色々な物事を吸収し、その結果ある子どもは礼儀正しくなり、またある子どもは今まで否定的だった留学に前向きになったなど影響があったそうです。今後もこの企画を続けていき、日本を知るだけでなく彼らの将来にさらに良い影響を与えられるものにしていきたいと思ひます。



福島×ネパール×ウクライナ間 クリスマスカード交換企画



芸術的センスと個性があふれるウクライナの子どものクリスマスカード作り。



完成後、自分が作ったカードを嬉しそうに見せるネパールの子どもたち。



福島市の2施設にもご協力いただきました。小さい子どもお母さんと一緒に作成して頑張ってくれました。

クリスマスカード交換も今年で3回目を迎えました。現地の子どもたちもこの企画をとっても楽しみにしてくれている印象でした。今後、インターネットなどを通じて双方が直接やり取り出来るようなプログラムも計画中です。



【ネパールの文化&食べ物紹介】



モモ: 水牛の肉や野菜が入った蒸し餃子で形は細長かったり丸かったり。



ドーナツ: 町中の食堂などで売られているおやつ。ほのかな甘みがあります。1つ10円程度。



トゥクパ: インスタントラーメンの様な汁そば。ネパール料理にしては珍しく辛い！



チャ: 1日に何度も飲みます。ミルクティー、コンショウやシナモンなどスパイスをふんだんに入れたストレートティーなど種類も豊富。



おかずとは別に生野菜が添えられます。お腹が弱い人は要注意...



中央のストゥーパ(塔)が目印のスワヤンブナート。周囲には経文が掘られたマニ車もあり、1度回せば経文を読んだのと同じ功德があるとされています。



バクタプールにある世界一背が高いシバ神の銅像。約40メートルの高さから国民を見守ります。



光のお祭り「ティハール」の際に家の前などに描かれるマンダラ(左)。家に神様を迎え入れる意味があるのだそうです。デザインは各家庭でさまざま。町の露店にはこれらを描くためのカラフルな粉が売られています(右)



【ネパール小話】

ネパールの人々が信仰するヒンドゥー教には破壊神シバ、幸運とお金をもたらす女神ラクシュミ、女性に大人気のイケメン神様クリシュナなど個性豊かな神様がたくさんいて、施設や人の名前にも付けられているほど身近な存在です。生活にも宗教が根付いているため宗教的な行事や祭りとなれば、行政機関もひっくるめて国がお休みモードに入ります。1カ月近くお休みが続いたり、急に国民の休日になったり、日本では考えにくいユニークな面がたくさんあります。

【ウクライナ(キエフ)のおすすめ観光地】

インターネットやガイドブックでキエフの観光スポットを調べると上位のほとんどに教会がでてきます。多くの戦禍を乗り越えたウクライナですが800年以上前から残る世界遺産の教会など歴史的な見どころがたくさんあります。古い建物も多く、歩いているだけで楽しめる素敵な国です。



ペチェールスカ大修道院: 11世紀半ばに創設された世界遺産。広大な敷地内に大聖堂や鐘楼が立ち並び、キエフの街並みを見守ります。



ペチェールスカ大修道院の中にあるウスペンスキー大聖堂。壁の下部分の色が濃いところは設立当初から残っています。



街角に立つ男女の銅像。男性の腰に止まっているクワガタを撫でると良いことがあるとか...



ウクライナでは有名なチョコレート店「ローシャン」。種類も大きさも様々なチョコが並んでいて見るだけで楽しめます。

発行: 一般社団法人 世界の子供たちのために (CheFuKo)

〒101-0062

東京都千代田区神田駿河台2-5-1住友不動産御茶ノ水ファーストビル8階

CheFuKo通信 vol.13
2018年12月17日発行

TEL: 03-5577-3155 FAX: 03-3291-0011

URL: <http://www.chefuko.org>

E-mail: info@chefuko.org



<https://www.facebook.com/CheFuKo/>



https://twitter.com/CheFuKo_japan



<https://www.instagram.com/chefuko/?hl=ja>

